

いぬはりに 環境 整備



特集：ジャクエツコラボレーション
プロダクトデザイナー 澄川伸一 × ジャクエツ
メビウスからはじまる「あそび」の未来形

特集：こども環境の未来をつくる
ジャクエツコラボレーションから生まれる
地域と保育園の未来のかたち
社会福祉法人 菊清会 ふかさわミル保育園 様



JAKUETSU Collaboration

澄川 伸一 × ジャクエツ

メビウスからはじまる 「あそび」の未来形

世界を舞台にプロダクトデザインの最先端を切り拓いてきた澄川伸一氏が、ジャクエツとのコラボレーションでつくり上げた新作遊具、「MEBIUS メビウス」。子どものためという遊具の境界線を超えて見えてくる、「あそぶこと」のこれからを澄川氏に聞きました。

澄川 伸一 / Shinichi Sumikawa
プロダクトデザイナー / 大阪芸術大学客員教授

東京都出身。1984年千葉大学工学部卒、ソニー（株）、ソニーアメリカを経て1991年独立。世界57カ国の滞在経験を活かした、常識を覆すデザインを実践。三次元CADとプリンターを活用した人間工学的な曲面設計を得意とする。ドイツのレッドドット・デザイン賞、富山プロダクトデザインコンペ グランプリ受賞、かわさき産業デザインコンペ '96デザイン優秀賞、その他、Gマーク受賞など多数あり。グッドデザイン賞審査員を13年間歴任。二級建築士。



与えられるあそびから、考えるあそびへ。

——メビウス制作におけるデザインコンセプトや造形の魅力などをお聞かせください。

まず、表側がいつの間にか裏側になるという「メビウスの輪」の不思議なループの形状を活かすことを、デザインコンセプトの中心としました。

実物をご覧になると一目瞭然ですが、メビウスは滑り台のように、登って滑るだけの遊具だとは捉えられません。大人でも予測できない形だと思つたのです。

その造形の中には、いわゆる秘密の場所があるんです。例えば、子どもがまるで王様になったような気分を味わえる場所だったり、微妙な滑り台だったり。それを子どもたちがどう発見してあそんでいくか、そこがポイントです。

場所によって形状も機能も変化するから、「子ども自身で考えながらあそぶ」という無限大のあそび方が可能です。

制作にあたっては「大人があそびたいと思つてくらのものでないと子どももつまらないのではないか」と考えました。少し哲学的な話になりますが、子どもがあそぶもの＝大人はあそびたくない、という図式は当てはまらないと思つたんです。

——たしかに、大人から見てもアートのというか、興味を引くデザインですね。

大人も興味を持つような遊具で、子どもたちは我々にも予測のつかないあそび方をします。その感受性の豊かさに驚きを感じることもあります。

最近では、ゲーム機に代表されるような二次元的なあそびがどんどん増え、身体を使うことが少なくなっています。しかし、本来、あそびというものは、子ども自身が考え、ふれて温度を感じ

たり、スリルを味わったりすることが原点だと思います。わくわく、ハラハラしながらみんなであそぶ、そういう遊具がこれからもっと大切になると思います。

——メビウスは複数であそぶことを想定した大きさです。そのサイズには何かこだわりがあったのでしょうか？

バネのついたメビウスには、揺らす人と揺らされる人という二種類のあそび手が存在します。5〜6名の園児が、それぞれ揺らす人、揺らされる人に分かれてあそぶバランスを考慮したときに最適なサイズだと思つています。

人数を5〜6名と想定した理由は、幼児期にそのくらいの人数であそんだ時に得られる「特別な高揚感」を体験してほしいと考えたからです。

自由にリング状の中に入ったたり、下に潜り込んだり、揺れるスリルを楽しんだり。一緒にあそぶ子どもたちの中から次々とアイデアが生まれるのも興味深いですね。

街の景観としても愛されるデザインを。

——それでは最後に、澄川さんの現在のテーマを教えてくださいませんか？

「機能的でありながら心地良さも感じられるプロダクトデザイン」がテーマでしょうか。

私自身の幼年期の記憶で印象に残っているのが、タコの形をした滑り台なんです。子ども心に、あの得体の知れない形も、さわるとひんやりする感触も、すべてが新鮮でした。

動物の形に限らず、昔からある滑り台をもっと洗練させ、たとえばアートの近い感覚を与えられるれば…それは景観としても、子どもの興味



MEBIUS シルバー
サイズ：W2554×D1559×H1020mm



不思議なループが、 右脳を刺激する

「これ、どうやってあそぶんだろう？」
ふれて、感じて、思考する。

メビウスには、遊具の新しい可能性が詰まっている。

MEBIUS レッド
サイズ：W2554×D1559×H1020mm



の対象としても、魅力的なものになるんじゃないかと思っています。
 今後、プロダクトデザインの世界では、これまで主流だった真っ白でなんでもないようなシンプルでデザインに対する反発が起きるのではないかと予測しています。もちろん主張しない方

がいいものもあるけれど、子どもの遊具ならもっと主張した形でもいいと思う。
 今一度、遊具について考える機会が訪れている時代だからこそ、街の中の風景として、人々に愛されながら子どもたちが楽しめるデザインを提案していきたいと願っています。

メビウスに夢中な子どもたちを見守る澄川氏。上に登る子、揺らしてあそぶ子……メビウスのあそび方には正解がない。一人ひとりが考え、一緒にあそんでいく中で楽しみ方を模索していく。子ども的人数だけ広がっていく可能性。それこそが、澄川氏がこの形の中で目指した姿だった。



Shinichi Sumikawa Products

世界が認める澄川氏のデザイン。最近ではリオデジャネイロオリンピック公式卓球台のデザインを担当。



ヒノキの浴槽技術を応用した「シャンパンクーラー」



ハサミ「エアロフィット」



2016オリンピック競技大会（リオデジャネイロ）卓球台



メビウスはFRP素材を使ったボディの土台にバネを用い、乗れば「揺れる」構造。安全性を最優先にしながら慎重に制作が進められた。



「運搬用トラックに載るサイズ」の中に壮大なスケール感を表現。こだわり続けてきた曲線デザインへの想いが形になった。



完成したメビウスは、斬新なフォルムと美しい形が目を引く。澄川氏曰く「大人もついあそんでみたくなるはず」

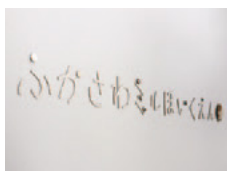


※1
[特集] こども環境の未来をつくる

ジャクエツコラボレーションから生まれる 地域と保育園の未来のかたち

東京都世田谷区 ふかさわミル保育園 様

信頼できるパートナーである建築設計事務所との共同設計により2016年春に完成。さらに第一線で活躍するインテリアデザイナーを加えた三者のコラボレーションが、より完成度の高い空間を実現しました。



社会福祉法人 菊清会 ふかさわミル保育園
世田谷区の保育施設整備事業の取り組みの一環として、国有地を区が借り入れ、事業者に転貸する手法で認可保育所として新設。事業者はこれまでの保育実績および今後のビジョンの提案等による事業者コンペティションで選定されました。
園舎構造：鉄骨造3階建て 定員：120名 2016年4月開園

スペシャル対談

株式会社アトリエ9 建築研究所
代表取締役・建築家 呉屋 彦四郎

株式会社ジャクエツ環境事業

建築設計部長 坂東 正



コラボだから成し得る 新しい発想、新しい可能性

三者一体のコラボから生まれるもの

坂東／今回は呉屋さん、インテリアデザイナーの五十嵐久枝さん（P.9で紹介）、私たちの三者がコラボレーションする形でふかさわみル保育園の園舎設計に取り組みました。これまでに何度も一緒にありますが、呉屋さんの設計はシンプルで明快、周りの環境に自然に溶け込んだ設計となっています。今回も主役である園児の姿がいきいきと引き立ち、子ども自身の想像力を掻き立てる仕掛けを施した園舎が誕生しました。

呉屋さん以下、敬称略／共同設計は園舎周辺の雰囲気になさわしい建物のデザインと、ジャクエツさんがお持ちの「子ども」「未来」「環境」といったテーマをどう一致させるかを考えるところからスタートしました。ディスカッションを重ねる中で、「もう一度、子どもの心や頭、身体、体感、食を鍛えることを見直そう」と提案させていただきました。同時に、保育園として成り立

ただけではなく、地域に根ざした大切な存在になれるデザイン・計画であることもクリアすべき課題でした。

坂東／地域のコミュニティとしての役割も果たすランチルームはその最たるところですね。私たちは早くから食育に根ざした施設づくりに取り組んできました。今回は食のスペースに文化的な要素を融合することができたと思います。

呉屋／そのランチルームの備品を、インテリアデザイナーの五十嵐さんにお願いたしましたことで、「やわらかくてあたたかな手のぬくもり」にあふれた空間が実現しました。開園前に五十嵐さんがデザインした椅子を並べてみると、カラフルな床とあたたかな色味の椅子がマッチしてとても可愛らしいんですね。改めて、五十嵐さんに依頼してよかったと実感した瞬間でした。

安全・安心のその先へ

坂東／私たちは何より園児たちの安全・安心を

最優先しております。しかし、その反面、危険を察知する経験を積むことも、心身の成長に必要なだと認識しています。いかに安全に園児が危険回避の能力を身に付けることができるかを模索する中で、今回のコラボレーションはさまざまな発想を生み出してくれましたね。

呉屋／そうですね。建築家としては、どうしてもすっきりしたものを求めがちなので、私たちがジャクエツさんの安全・安心という視点から学ぶことはたくさんあります。

坂東／既に「園舎が遊具」をコンセプトとした新たなプロジェクトにもブレインとして参加いただいておりますし、共同設計によって生まれる構造や仕掛けが、今後こういった形で展開されるのか非常に楽しみです。

呉屋／園舎全体をあそび場としたこれまでにない試みであり、ぜひとも成功させたいと思っています。これからも、コラボレーションを通じて園児たち・地域がともに発展できる保育環境を提供できることを願っております。



園児がぐるぐると元気に駆けまわる外階段は格好のあそび場でもある。



建物側面。左からランチルーム展示棟、事務管理棟、保育室棟の3つの棟から成る。



通りに面し、地域に新たなコミュニケーションを生むランチルーム。

呉屋 彦四郎

宮崎県生まれ。大学院在学中、ローマで建築家トマーソ・パッレに師事。谷口建築設計研究所、丹下健三・都市・建築設計研究所を経てアトリエ9建築研究所設立。主な作品／えびの涼風園新館（H25年度農林水産大臣賞受賞、2014年度グッドデザイン賞BEST100受賞） 深谷上柴保育園（2015年度グッドデザイン賞受賞） S residence（2012年第44回中部建築賞受賞）

子どもたちにとって、居心地よく
あたたかい場所になるように



真っ白なテーブルは食べ物の色をきれいに見せ、部屋を明るい印象に。長方形のテーブルは角がなく、子どもたちの動きもスムーズ。半円形のテーブルは二つ合わせると大テーブルにアレンジできる。やわらかな色合いの椅子は、床材ともうまくマッチしている。優しい印象の備品はどれも、五十嵐さんによるオーダーメイド。





上：前面道路側に配置したガラス張りのランチルーム。
 下左：ランチルームで食事を楽しむ園児の姿が通りをゆく人の微笑みを誘う。
 下右：墨×白の洗練された色づかい。春には墨色の壁面が桜を引き立てる。



「見える」「つながる」保育園へ 子どもたちの未来を担う深沢の新しい顔として

大切にしたのは、園舎がある閑静な住宅街「深沢」らしさ。この場所に建てる意味を模索しながらつくられた園舎への想いと、こだわり。

子どものためのデザインとは

子どもは概念にとらわれない自由な表現ができ、無限の可能性を秘めています。だからこそ、彼らが過ごす場所、使うものは喜びと驚きを生み出すデザインであって欲しいですね。ランチルームのアクセントでもある下駄箱は、パーティションとしての役割も生み出します。開放的なエントランスにやわらかな雰囲気プラスできるよう考えました。曲線の背面を本棚にしたことで、並べられた絵本が立体的な印象を与えます。

五十嵐 久枝 hisae igarashi
 インテリアデザイナー

東京生まれ。イガラシデザインスタジオ代表。商業空間デザインから、インсталレーション・家具・プロダクト・幼児施設遊具など商品開発を手掛ける。携わる範囲は「衣・食・住・育」と広がり、現在形でのデザインを信条とする。武蔵野美術大学教授、グッドデザイン賞審査委員。



南北に細長い土地を活かし、南北に園庭、バス停通りに面した北側にランチルーム棟を配置。表通りからランチルーム内がすべて見える大胆な園舎設計には、「食育」をテーマとする園の保育理念がしっかりと反映されています。

「日々の子どもの活動を見せることで、園と街とのコミュニケーションが成立するのではないかと語るのは、共同設計にあたった建築家の呉屋さん。あえてすべてをオープンにすることで、地域に開かれた保育園の姿を目指しました。

さらに、ランチルームでは、食育にとどまらず文化的な発信を目指し、昇降式の展示パネルが設置され、園児が描いた絵や工作を自由に飾り付けることができます。天井にこのほりや七夕飾りを吊り下げられるバトンも設けたことで、地域の人々により保育園を身近に感じていただける工夫を施しました。

園舎の外に目を向けると、この土地が国家公務員宿舎だったことから地域のシンボルとして親しまれてきた桜の木が、園舎を取り囲むように残されています。春には墨色の外壁を借景とした満開の桜が、まるで一枚の絵画のような景観を見せ、その中を園児たちが元気に駆け回る姿が、通りを行きかう人々の心を和ませます。

また、大人に比べると床との距離が近い園児たちのために、床材には安全性に優れた天然素材のリノリウムや無垢のパイン材などを使用。園児たちの心と身体を鍛えながら、地域とのつながりも深められる園舎が誕生しました。

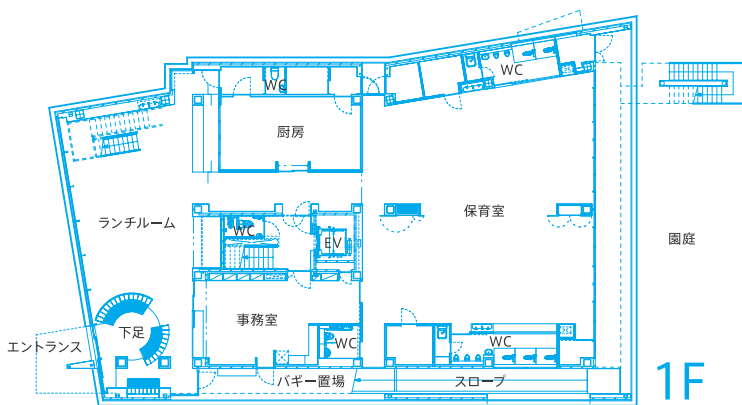
保育理念を全うしつつ、地域のシンボルとしても愛される保育園と園舎…それを実現したモデルケースが生まれたことは、今後の園舎設計にとっての大きな一歩となりました。



地域とのコミュニケーションを図る ランチルームと壁面ギャラリー

01

ガラス張りのランチルームは、暖かな日差しが差し込む。外からも見える壁面ギャラリーはパネル式になっており、一つ一つの入れ替えが可能。



ぬくもりを体感しながら 園児たちは成長していく

建物全体は、「ランチルーム展示棟」「事務管理棟」「保育室棟」という役割に合わせた3つの棟から構成されています。園庭と屋上テラスをスロープ・回廊でつなぎ、一体化することで、外あそびに必要な屋外スペースを確保しました。



03

異年齢の園児たちが 一日を共に過ごす 保育室

天井のライティングにもこだわりを感じる保育室は、水回りを両サイドに配し、園児たちの姿をどこにも見えるように設計。可動式の間仕切りなど、部屋は工夫次第でさまざまに使える。



素足で駆けまわる園庭

園庭では園児も先生もみな素足。地面の感触やぬくもりを感じながら外あそびを楽しむ。園庭と屋上3階のテラスを結ぶスロープや回廊式の廊下は、内外の変化に富んだ楽しい移動空間として活用。

02



先生の目が届き 開放的な空間使いの 2階ランチルームと保育室

2才までの園児たちは、下へ降りる負担も考慮してランチルームを2階に設置。保育室と一体となった場所で、昼食、お昼寝など一日の多くの時間を過ごす。こちら水回りの場所には気を配り、先生たちの視点で園児たちを見守れる設計に。

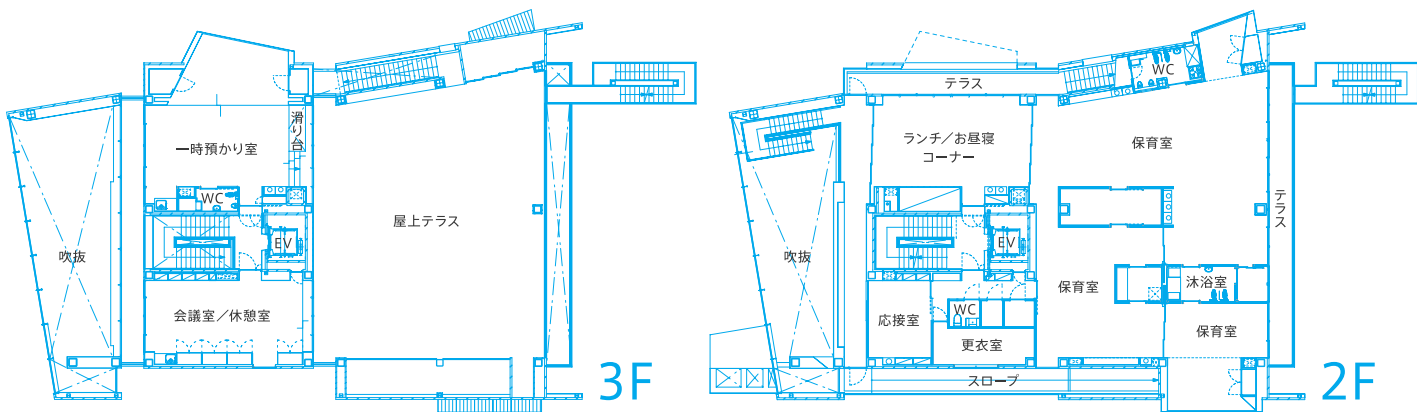
04

園ではどの子どもご飯づくりに興味津々。ガラス窓の向こうに運ばれてくる旬の食材や調理過程を見ることが「食べる意欲」につながる。

園児の目線に合わせ 作り手との距離を近づける厨房



05



06

季節の移ろいと 木のぬくもりを感じる 3階一時預かり室と 屋上テラス

窓の外にはこの地域の象徴でもある桜の木々を一望。一つの空間を、ステージ&ホール、一時預かり室と多目的に利用できる構造としたことで、限られたスペースを有効活用。滑り台でつながった屋上テラスの床はパイン材。夏でも熱くなりすぎることがなくあそべる。



設計事業所 ARCHITECTURE OFFICE

子どもたちが主役の「宮殿づくり」

ジャクエツの園舎設計のコンセプトは“子どもたちの宮殿づくり”。
 これまでに、幼稚園・保育園専門の設計事業所として、
 400園の園舎を設計させていただきました。
 プランニングからアフターフォローまで、
 子どもたちの成長を第一に、それを支える職員の皆さまを
 施設設備の面からサポートいたします。

株式会社 ジャクエツ 環境事業

一級建築士事務所 東京都知事登録 第44805

東京本部

〒108-0074 東京都港区高輪4-22-4
 TEL 03-5789-1100

広島設計室

〒730-0843 広島市中区舟入本町6-21
 TEL 082-531-0770

福岡設計室

〒812-0896 福岡市博多区東光寺町2-8-31
 TEL 092-451-0117

宇都宮設計室

〒320-0847 宇都宮市滝谷町20-17
 TEL 028-614-5070

名古屋設計室

愛知県知事登録(い-27) 第13105号
 〒460-0012 名古屋市中区千代田5-11-32
 TEL 052-265-2730

大阪設計室

大阪府知事登録(イ) 第24853号
 〒555-0012 大阪市西淀川区御幣島3-11-3
 TEL 06-6471-3939



こども環境の未来をつくる



ジャクエツ